

答えはすべて解答用紙に書きなさい。

一、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

●2020年6月5日（中略）

こんばんは。作家の高橋源一郎です。少しずつですが、日常が戻りつつあります。みなさんはどうでしょうか。

前回の放送の直後、おそらくはSNSでの誹謗中傷のせいで、ひとりの若い女性が命を絶ちました。その、痛ましいニュースを耳にしながら、ぼくは、この番組でも紹介した、「新型コロナウイルス」の流行以降、世界中でもっとも読まれている本、カミュの『ペスト』のある登場人物のことばを思い出しました。彼は主人公である医師のリウーにこう告白します。

「誰でもめいめい自分のうちにペストをもっているんだ。なぜかといえば誰一人、まったくこの世に誰一人、その病気を免れているものはないからだ。そうして、引きつりにしに、自分で警戒していなければ、ちよつとつかりした瞬間に、ほかのものの顔に息を吹きかけて、病毒をくつつけまうようなことになる。自然なものというのは、病菌なのだ。そのほかのもの——健康とか無傷とか、なんなら清浄といつてもいいが、そういうものは意志の結果で、しかもその意志は決してゆるめてはならないのだ。りっぱな人間、つまりほとんど誰にも病菌を感染させない人間とは、できるだけ気をゆるめない人間のことだ。しかし、そのためには、それこそよっぱどの意志と緊張をもって、決して気をゆるめないようにしていなければならぬのだ」

口から出る「息」に含まれ、他人に感染して傷つけるもの。いうまでもなく、それは「ことば」に他なりません。「ペスト」を、いや、あらゆる、人を傷つけるウイルスを、ぼくたちはみんな持っているのです。ぼくは半世紀以上も前から、カミュの愛読者で、おおよそ手に入るものはみんな読んできましたが、いまのことばに、カミュが生涯をかけたメッセージが詰まっていると思います。人を傷つけることばを吐くことがいけないことは、誰でもわかる。けれども、なぜか、カミュは「誰一人、まったくこの世に誰一人、この病気を免れているものはない」というのです。

誰でも、自分は正しいと思って、ことばを発します。それでも、そのことばは、どこかで誰かを深く傷つける。どんなことばでも、それがいやなら、沈黙するしかありません。それを知りながら、カミュは、ことばを発すること、書くことをやめませんでした。①だから、カミュのことばは、自信たっぷりではなく、とまどいながら、自分自身を疑いながら、怯えながら、書かれています。それだけが、「ペスト」のよう

うに感染し、人を傷つけることばにならない可能性を持つことを知っていたのです。（中略）

●2020年12月11日（中略）

先日、ぼくも大好きな、パンクロックバンド、銀杏BOYZのヴォーカルでシンガーソングライター、優れた俳優としても知られる峯田和伸さんのインタビューが話題になりました。ぼくもそれを読んで、感心し、そしてそのインタビューの最後に出てきたことばに強くうたれたのです。

峯田さんは、ツイッターやSNSで、人々が、みんなひとつの方向に流れ出そうとしていることが怖いと思いました。それは、文句をいっているうちに、どんどん悪い感情に押し流されていくからだ。インスタグラムをやっている峯田さんに、ひとりしかフォローしていないのはなぜですか、とインタビューが訊ねると、峯田さんはこう答えました。

「誰かとつながろうとか、一切ないんだよね。もう、この年で新しく誰かとつながりたいとか、友達できたらいいなとか思わないよ。今いる友達とずっと会っていたいの。つながりたくないんだよね、誰とも」

たとえば、「ギズナ」ということばが持っているイヤらしさに、峯田さんは敏感なのだと思えます。そして、誰かがなにかをしてくすと、みんなが「謝罪しろ」というAフウチョウ。自分の友だちでも知り合いてもなんでもないので。みんなストレスがたまっている、誰かが謝るところを見たいのだからか。あるいは、有名な人が亡くなると、みんなが一斉に「冥福を」と声をあげること。どうして、みんな「関係ないね」といわないのだろうか。そのことについて、峯田さんは、こういうのでした。「世の中で何かが起こった。さっぱり関係ないはずなのに、『私はこう思う』とか、世界とすごくくっついちゃってさ。本来、自分と世界なんて違っじやん。別に関係ないんだもん。世界と一個になろうとしてるんだよね。世界と一個になんかなれないよ、そんなの」。そんな峯田さんの気持ちをひとこといいあらわすことば。それを、

インタビューが思い出させます。去年の武道館での銀杏BOYZの公演のタイトルでした。

「②世界がひとつになりませんように」

いいことばだ、と思いました。峯田さんはいます。

「ネットってさ、最初のころはすごい楽しみで『あつ、世界が近くなる』『もつとわからない世界が知れるようになる』『ってワクワクしたんだけど。今はそんなにワクワクしない。広がると思ったのに、どんどん狭くなっちゃって』と」

バラバラだからおもしろい。バラバラだから、広い。ひとつの意見、ひとつの考えになった瞬間に、その世界は狭く、息苦しいものになってゆきます。

だから、「世界がひとつになりませんように」。（中略）

●2022年2月25日（中略）

入ってくるニュースは、どれも戦争に関係したことばかり。いろんな人たちがあらゆるところで、いろんな意見をいっています。なんだか、ぼくたちも、なにかをしなきゃならない、なにかをいわなきゃならない。そんなふうに従い立てられているような気がします。みなさんはいかがでしょうか。ところで、ぼくの好きな、お釈迦様のことばに、こういうものがあります。

「犀のようにただひとり歩め」

このことばにはどんな意味があるのだろうか、とよく考えます。犀は群れない動物で、ひとりで生きるのだそうです。性質は鈍重で、視力も弱い。けれども、嗅覚と聴覚に優れ、自分の鼻先の一本の角をまるで目印のようにして、周りの世界を確かめながら、ゆつくり、ただひとりで前へ進んでゆくのです。

東日本大震災で原発が壊れたころ、ぼくは、ある新聞で論壇時評を書いていました。そして、原発についての情報とBハクネットした議論が、ものすごいCイキオイで溢れだしていました。そのことについて書くとしたとき、ぼくは、自分に、なにかをいうだけの知識が欠けていることに気づきました。だから、ゆつくりやろう、とぼくは自分にいい聞かせたのです。最初にやったのは苦手な物理の高校時代の教科書を読むことでした。それから、原子力の基礎知識、原子炉工学の教科書を初級からステップを踏んで読み、原子力学会の学会誌を読んで意味がわかるようになったのはその年の終わりでした。けれども、そのころには、もう原発や原子力問題について書く必要がなくなっていたのです。それでもよかった、とぼくは思いました。納得がいくところまで犀のようにゆつくりただひとり歩いていくことができたのだから。

いま、ぼくは、ウクライナの作家の作品をずっと読んでいます。ウクライナ語からロシア語に訳されたものをさらに翻訳ソフトにかけて、ということもあります。そして、ウクライナと縁の深い、たくさんのロシアの作家の作品も。すると、少しずつ、その国に住む人たちの顔やことばづかいがわかってくるような気がするのです。それがなんの役に立つのかという考えもあるでしょう。もちろん、なにかをすぐにしなければならぬこともあります。ぼくは「③見る前に跳べ」ということばも大好きです。けれども、「④犀のようにただひとり歩む」ことを忘れたくないとも、強く思うのです。

問一 □ A～Cのカタカナを漢字に直しなさい。送りなががある場合は、それも含めて答えなさい。

問二 一部①とありますが、何にとまどい、何に怯えているのですか。簡潔に答えなさい。

問三 一部②とありますが、峯田さんはなぜ、世界がつながってひとつになることを望まないのですか。説明しなさい。

問四 一部③④とは、それぞれどのようなことの比喩ですか。簡潔に答えなさい。

問五 作家である筆者は、カミュ・峯田和伸という表現者のどのような点に希望を感じているのですか。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

レジをすませてエコバッグ二つに食料を詰め、わたしは片手にリュックの入った紙袋、もう片方の手にエコバッグを持った。お姉ちゃんはトイレレットペーパーとエコバッグを持って出口に向かった。

ショッピングセンターから出たところに、おばあさんが一人立っていた。足もとに、ふくらんだ買い物を二つ置いている。その人がおばあさんだとわかったのは、つばの広い帽子の下から見えている髪が白かったからだ。

「おばあさんは腰をかがめると、いかにも重そうにそれぞれの袋を持ちあげた。
「大丈夫ですか」

「おばあさんに声をかけたのはお姉ちゃんだった。
「いえね、ちょっと膝が悪いもんだから。休憩していたの」とおばあさんは言った。膝が痛いことを恥じるような口ぶりだった。

「荷物、一つお持ちしましょうか」と言ったのもお姉ちゃんだった。

わたしはびくっとした。その人が今井さんだとわかったからだ。わたしの胸の中には、おとつい今井さんに言われたことがずっしりと残っていた。今井さんの話をきいていたときには今井さんの言うことには正しさのようなものがある気がしたのに、今井さんから離れたあとでは今井さんの何が正しいのか、正しさの意味がわからなくなってしまうていた。

今井さんは、わたしにはまだ気づいていないようだった。

「あら、あなたたちこそ荷物をたくさん持ってらっしゃるのに」

今井さんはわたしたちが持っている荷物に目をやった。

「大丈夫です」

そう言うのと、今井さんが何か言う前に、お姉ちゃんはわたしに「そっちのリュックを背中にしよって。このトイレットペーパーをあなたが持つて」と言った。「リュックが入った紙袋はリュックに入れちゃえばいいでしょ」

それから「持ちます、持ちます」と言って、お姉ちゃんは今井さんの手から奪うようにして買い物袋を一つ受け取った。

「いいの？　ほんとうに？」

今井さんはお姉ちゃんを見て、わたしを見た。それでも今井さんは表情を変えなかった。まだわたしに気づいていないようだ。大人から見れば、子どもの顔はみんなおんなじに見えるのかもしれない。わたしも何も言わなかった。

「平気です」とお姉ちゃんは言った。

「悪いわねえ」と言いながら、今井さんは歩きだした。「ついつい買いすぎちゃって」

今井さんとお姉ちゃんが並んで歩く後ろをわたしは歩いた。

今井さんは歩きながら、ときどきお姉ちゃんに歳をきいたり、学校のことをきいたりした。

「車の運転をずいぶん前にやめたもんだから、ほんとうに不自由で。さっきタクシーに乗ろうかとAシアンしてたところだったの。だけどおかげで助かったわ」

わたしは前を歩く今井さんの帽子の下から見えている白髪を見る。(中略)

信号で止まるたびに今井さんはわたしをふり返り、「大丈夫？」と声をかけた。

初めて会う子を見る目でわたしを見た。

わたしは黙ってうなずいた。今井さんはわたしに気づいているはずだった。あの黒い服の子だ、とわかっているはずだ。なのに今井さんは気づかないふりをしている。わたしは二人のBボチヨウに合わせについていった。

水色の格子柄のワンピースを着て、スカーフを首に巻いている今井さんはやさしそうなおばあさんに見える。①あんなことをするような人には見えない。

信誠Cフドウサンの角まで来たとき、今井さんは「もうここでもいいわ。ここからだともうすぐだし、ゆっくり歩いて帰れば大丈夫だから」と言った。

わたしは、よかったと思った。

「でももうすぐなら、ついでに家まで持って行ってあげます。へっちゃらです」とお姉ちゃんは言つて、「こっちですか」と、先に角を曲がっていった。

「若い人はいいわねえ。力もあるし、脚も丈夫だし。髪の毛もつやつやしてるわ。年を取るというんなものを失っちゃうから、それが心細いのよ」

お姉ちゃんはうなずきながら話をきいている。

「思うようにならないことはっかりよ」

お姉ちゃんは大きくうなずく。

踏切を渡り、それから佐々村整体治療院の前を通りすぎた。お姉ちゃんがわたしをちらつとふり返った。わたしが何度も佐々村さんの話をしていたから、ぴんときたのだと思う。わたしは知らん顔をしていた。

* 椿 カイロプラクティックの前も通りすぎた。

「こんな静かなところですかね。この道の先の家が空き巣に入られたのよ」と今井さんはお姉ちゃんに言った。

「怖いですね。その犯人、捕まったんですか」

「どうもまだみたい。そんなこと、これまで一度だってなかったのに物騒でしょ。ときどきパトカーがまわってくれているけど、それもいつまでもつてわけにもいかな

いから」

「鍵、しっかり掛けてくださいね」とお姉ちゃんはやさしい声で言っている。

お姉ちゃんて、こんなに親切な人だったわけ、とわからなくなる。家の外で、お姉ちゃんはいったいどんな顔をしているんだろう。

今井さんの家に着いた。

「どうもありがとう」

今井さんはお姉ちゃんの手から買い物袋を受け取り、それから「ちょっと待って」と言つて門の中へ入つていった。

「ほら、お庭を見て。バラがきれいだよ、羽美」とお姉ちゃんは言った。

「知ってる」とわたしはこたえた。

今井さんはすぐに現れた。手には英語の文字が書かれた菓子袋を持っている。中に、一つひとつが銀紙に包まれている小粒のチョコレートらしいものがたくさん入っているのが見える。今井さんはその袋をお姉ちゃんがさげている買い物袋に押し込んだ。

「ほんとうに助かったわ。ありがとうございました」
今井さんはお姉ちゃんに頭をさげ、それからわたしにも頭をさげた。
そして顔をあげてわたしを見た。

「こんなやさしいお姉さんがいらつしたのね。また遊びにいらつしやい」と今井さんは言った。

おとつい会つたばかりだというのに、そのことには触れなかった。あれだけおしゃべりしたことを忘れたような顔をしていた。

「ありがとございませう」とお姉ちゃんは返事した。

わたしは何も言わなかった。(中略)

椿カイロプラクティックの前を通りすぎるときに、わたしは「ここ」と、持っていたトイレットペーパーをお姉ちゃんに渡してからカイロプラクティックを指差した。

「何が」

お姉ちゃんは立ち止まってカイロプラクティックの小さな建物を見た。(中略)

*2 マンションの入り口ところに生ゴミが捨てられてたの。さっきの今井さんがね、捨てたの。わたし、おとつい今井さんちにあがつたんだよ。今井さん、捨てたのは抗議のつもりだったって言つた。悪いことかもしれないけど、自分が猫から受けている被害に比べればなんてことないつて」

お姉ちゃんは今井さんの家のほうをふり返った。今井さんの家は突き当たりを右に曲がつたところにあるから、ここからは見えない。

「羽美が言つていたのはさっきの人だったんだ」

お姉ちゃんは驚いたようだった。

「猫と犬が大嫌いなんだつて」

「ふうん」

お姉ちゃんは小さく息を吐き、「羽美はずっと犯人捜ししてたんだ」と言った。

「行こう」とわたしは言った。「今井さん、もうしない、つて言つた」

「そうか。そんなふうには見えなかつたけどね、あの人。わかんないね、人つて」

歩きながらお姉ちゃんは言った。

「自分のやつたことは正当化しませんが今井さんは言つたの。自分が何をしたかわかつてますつて。恥ずかしいことだつて」

「ふうん」

お姉ちゃんは小さくうなずいた。

「おうちをとつてもきれいにしているの。お庭も。隣の家からピアノがきこえてきたり、家の前に無断で車を止められたりするのを迷惑がつた。子どもが隣の空き地で遊ぶのもいやみだつた」

「羽美。いいところへ連れていつてあげようか」とお姉ちゃんは言った。

「どこ」

「すぐ近く」

佐々村整体治療院の前を通りすぎるとき、お姉ちゃんは顔だけそちらに向けて玄関ドアの周囲にくついているDヒョウサツや貼り紙などを見た。

「なるほど」とお姉ちゃんは言った。

踏切を渡つて信誠フドウサンの角を曲がつた。しだいに買い物袋が重く感じられしてきた。でも我慢した。

「どこ」

「すぐ近く」

お姉ちゃんの手持っている袋のほうに大根や牛乳など、重いものがたくさん入つて

いるはずなのに、お姉ちゃんは重そうな素振りも見せず、どっちかというとき軽やかに歩いていく。

小学校の前を通りすぎると、「こっちだよ」と古川電器の角を曲がった。
わたしたちは黙って歩いた。

お姉ちゃんが連れていったのは宝ヶ池だった。古川電器の角を曲がったあと、また踏切を越え、そこからゆるくカーブした道の先にあった。

「あ、ここ、久しぶり」とわたしは言った。

前はときどき遊びに来ていた。春に、お花見に家族みんなで来たこともある。あれはわたしはまだ保育園に行っていた頃だ。

ひょうたんの形をしている宝ヶ池の周囲は散歩道になっていて、桜のほかにもいろんな木が植えられている。藤棚もある。ベンチもところどころに置かれている。

道路から一段高くなったところに土手があり、土手にあがって見ると、池はかなり低い場所にある。

「あそこで休憩しよう」

土手からお姉ちゃんは池の畔の藤棚の下でベンチを指差した。池に沿った散歩道を犬を散歩させている人や、ほかに三、四人の人がいたが、ベンチには誰も座っていない。池のまんなかに噴水があり、水が丸く円を描いて吹きあがっている。

わたしたちは土手の上を公園の入り口へとまわり、石段をおりていった。

池の向こう側にハーモニカを吹いている男の人がいた。

池の縁をまわって藤棚まで行くと、お姉ちゃんもわたしも荷物をおろし、ベンチに腰をおろした。リュックはしまったままだった。(中略)

「おとつい、ここに久しぶりに来たんだよね」とお姉ちゃんは言った。

お姉ちゃんは買い物袋をさぐり、「キスチョコ食べよう」と、さっき今井さんがくれた袋を取りだした。

袋を破り、わたしのひらにキスチョコを数個落とした。(中略)

「あのね、いい人間になるのってEムズカシイよ」とお姉ちゃんは言った。「そういうことを、ここで考えた」

お姉ちゃんは噴水を見ている。

「いい人間？」

急に言われてもわからない。たぶん、そのことについて、わたしはあまり考えることがない。

「わたしね、小さいときからどうしたらいい人間になれるんだろうって考えてたんだ。大きくなったらいいい人間になりたいと思ってたから」

「うん」

わたしも噴水を見つめる。水はいくらでも、あふれて光になる。

「誰かにいいことをされても、我慢しなきゃいけないと思ってたこともある。我慢するのがいいことだと思ってたから。だけど我慢しているのと、いい人間になるというのは違うことなんだよね」

わたしはお姉ちゃんが家でそんなにいつも我慢していたっけ、と考える。お姉ちゃんはいつもわたしの上に君臨してなかった？と思っただけ、言わなかった。

「かすみちゃん。おぼえてる？」

「おぼえてるよ。お母さんが病気で困ってたんだよね」

「わたし、かすみちゃんの役に立ちたいと思って、いろいろお手伝いしてたんだけど「知ってるよ」(中略)

「かすみちゃんのお母さんが病院に行くとき、一緒にいていったことがあるんだけどね。お母さんが診察室に入っているあいだ、わたしは待合室で待っていたの。そのとき、わたし、かすみちゃんに『お父さんとお母さんは、どうして離婚なんかしちゃったの？』ってきいちゃったんだよね。かすみちゃんは『知らない』って、そのときはこたえたんだけど、かすみちゃんは、わたしがそんな質問をしたことで怒ったのかもしれなかった。っていうか、傷ついたのかもしれない。そのときはそんなこととは思わなかったんだけど。だってなんでもない質問だとわたしは思ってたから。そのあと何度かかすみちゃんに行っただけ、なんだかそれまでとは感じが違っちゃって、それからちよつとたって、『もう、うちに来ないでくれる？』って言われたんだよね」

「えー、わかんない、わたし」
「だろうね」

お姉ちゃんは自分の膝の上にある手に目を落とした。

「わたし、そのあと、やっぱりあんなことをきいちゃったから、だなんて思ってたんだ

けど、でも、そうじゃなかったかもしれない」

池に張り出した場所にいた高校生らしい二人が立ちあがって池の外へと出ていった。

「わたし、お姉ちゃんて、すごく親切だなあって思ってたよ。いろいろ親切にしてあげてたじゃん」

「そういうのが不愉快になる人もいるよ」

「だけど村重さん、ほんとにそんな質問で怒ったの」

「それはね、わかんない。もしかしたら、わたしが親切ぶっていることがいやだったのかも。親切にするって、親切にしてあげてるほうはいい気持ちになれるけど、ずっと親切にされるのって苦しいかもしれないから。かすみちゃん、ほんとにわたしのことが、ずっと前からうつつとうしかったのかもしれないんだよね」

「じゃあどうすればいいの」

「わかんないけど。いいことをしようとしても人を傷つけてしまうこともあるんだから、②いい人間になろうと自分で思っただけで何かするってことはまちがだったって、おとついここで思いました。はい、おしまい」

「おしまいにしないでよ」

「羽美が、誰が悪いことをしている人かって、いろんな人を疑ってたから、わたしも自分のことを考えてみる気になったのかもしれない。いい人がまるごといい人ってわけじゃないし、悪い人だと言われている人がまるごと悪いわけでもないよ。そんなに簡単に分けられないんじゃないのって言いたかっただけ」

「じゃあ、いい人っていいの」

「いるよ。いいことをしようと思わないでいいことをしちゃう人はいるよ。だからって、その人がまるごといい人ってわけでもないよ、やっぱり」

「なにそれ。今井さんは普通のやさしそうなおばあさんに見えるのに、夜こっそり生ゴミをマンションの前に捨てに行ったり、悪口を書いた手紙を近所に配ったりしたよ。猫が自分の庭にうんちやおしっこをするからって、仕返ししたの。それってやっぱり悪いことだよ」

お姉ちゃんはふんふんとうなずき、「そうなんだよね」と言った。

「なにが」

「あの人がきつと孤独なんだと思う」

「孤独？」

「わたし、わかるんだよね。どんな孤独になって、普通に物事を判断できなくなることってあると思うよ。いつのまにか、誰かに自分が攻撃されてるって思い込んで、じゃったんじゃないの。だからやっちゃったんじゃないのかな」

「そうかなあ。わかんないよ」

「いい人の中から悪い【ア】が伸びることもあるんじゃないの。正しい行いの中に【イ】が混じっていることもあるんじゃないの。だから、いい悪いは簡単には言えないよ」

「そんなのいやだなあ」

「羽美が佐々村さんや今井さんのことを嗅ぎまわっていたことって、たぶん無駄じゃないよ。大道さんが犬をもらってあげるって言うてくれたのも、羽美が親身になって細田くんの悩みに付き合っただけだからだよ。それに今井さんから『もうしない』って言葉を引き出したんだから、今井さんに会いに行った意味もあるよ。ね。じゃあそろそろ帰ろうか」

お姉ちゃんは買い物袋とトイレトペーパーを持って立ちあがった。

わたしも立った。

* 1 樺カイロプラクティクⅡ佐々村整体治療院の近くに新しくできた。悪口を書かれた手紙を配られている。

* 2 このマンションⅡ樺マンションのこと。犬や猫などのペットが飼育できる。

問一 □ AとEのカタカナを漢字に直さない。送りがある場合は、それも含めて答えなさい。

問二 【】ア、イにあてはまる漢字一、二字の言葉を次のひらがなから選び、漢字に直して答えなさい。

おし いろいろ め ゆうき りょうしん けいさん ぜつぼう

問三 一線部①の「あんなこと」とはどういうことですか。具体的に答えなさい。

問四 一線部②のように言うのはなぜですか。くわしく説明しなさい。

問五 一線部について、なぜ「お姉ちゃん」は羽美をこのようにさそったのですか。くわしく説明しなさい。

には記入しないこと。

()

問一		問二		問三		問四		問五
A	B					③	④	
C								

問一		問二	問三	問四	問五
A	D	ア	イ		
B	E				
C					

出典

一 高橋源一郎『高橋源一郎の飛ぶ教室』

――はじまりのことば『みづ』

二 岩瀬成子『ひみつの犬』